
ある男の物語

ガイハン・ボシ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ある男の物語

【Zコード】

Z5759D

【作者名】

ガイハン・ボシ

【あらすじ】

「今からあんたに俺のぐだらねえ人生を語つてやるよ。」そう言って彼は自分の恋愛譚を語りだした。遺言として・・・。その男の物語を語り継いで行く為、私は筆を取りここに記す。

(前書き)

「」に記すは波乱万丈な男の生き様！
とくとく覧あれ！

・・・まあ、楽しんで頂ければ幸いです。

「なあ、そこのあんた。ちょっと俺の話に付き合わないか?いいじゃねえか。どうせ暇なんだろ?」この払いは俺が持つからよ。

恋愛物語の主人公って奴あ幸せ者だと思わないか?どんなに苦しい状況に追い込まれても、最後には必ず愛する者と結ばれるんだからよ。

けどよ、現実はそんなに甘くはない。そういうう?

この世に、恋を実らせられた者がどれほどいるってんだ?

愛する者に、心から愛された者がどれほどいるってんだ?
俺は26年と2ヶ月しか生きちゃいないが、3人の女を好きになつた。だが俺の恋は物語のようにはいかなかつたんだなあ。これが。今からあんたに俺のくだらぬ人生を語つてやるよ。まあ、そんな顔しないで聞いてきなつて。しがない一兵士の遺言や。この先の人生の参考にしな。

なんたつてこの世は、どうしようもなく非情だからな。

まずは俺が15才の時の話だ。11年も前の話だな。その頃は俺も若かつたんだぜ?考える事も、な。

それまでダチと馬鹿ばつかやつてた俺も、一丁前に好いた女ができたんだ。身の程知らずと笑つてくれよ。好いた女は7つも年上の、貴族様の御子女だぜ。

どこで知り合つたかって?俺も落ち着きがなかつたからな。仲間集めて馬鹿なことやつてたのさ。貴族の屋敷に侵入して度胸試しか、な。当然見つかりやただじやすまねえ。そんなことして何が面白いんだか、今じゃわかんねえけどな。

で、その時にへまやつちまつてよ。見張りに見つかつちまつた。

闇雲に逃げ回つた末に、気が付きや女の部屋に飛び込んでな。隠れ場所を探してたらきれいな声で呼ばれたんだ。誰だつてな。そのときは、もう観念して罰を受けようか、それとも女を盾に逃げ延びようか考へてた。今にして思えば物騒なこと考へたもんだ。そしたらそいつは窓を開けて、言つたんだ。この木を降りれば簡単に逃げれるつてな。いつも言つた。また今度お友達も連れて遊びに来ないか、つて。そのときは何も言わずに逃げた。良家様の御子女殿は考えることがわからん、とか思いつつな。

これが最初の出会いさ。へんてこだろ？

その後、ちょっととしてから行つてみたんだ。何となく、暇つぶしにな。いや、違うか。ホントはちょっと気になつてたんだ。あんな綺麗な声で話す女が、どんな顔してんのかな、つてな。あん時は部屋が暗くてよく見えなかつたんだ。思えばその時既に魅かれてたのかもしれねえな。

実際会つてみると、やっぱ綺麗な面してたな。そん時あ気づかなかつたが、俺は確実に一目惚れしてたね。話してみると、ますます魅かれていつた。魅かれていつちまつた。

俺は何度も、それこそ毎日会いに行つたよ。庶民のくだらねえ日常の話を、その女は楽しそうに聞くんだ。その女にとつては退屈しひぎでも、俺にとつては何よりも幸せな時間だつた。ダチを連れてきてもいいくて言われてたんだが、俺は結局最後まで連れて来なかつたな。わかるだろ？連れてきたくなかったのさ。

逢つてから半年経つた頃だ。その女は城に行くことになつた。ほとんど屋敷に帰つてくることはないらしい。その時は理由なんて全く考へてなかつた。愛しの女が手の届かないトコに行つちまうんだ。それどころじやねえだろ？俺は、それはもう苦悩したぞ。三日三晩悩んで、ようやくこの燃え上がる想いをぶつちやけようと決心した。ああ？大袈裟だつて？そりや他人から見たら滑稽かもしけんが、俺はその時本気で悩んだんだよ！若かつたしな。だがな。その時はも

う手遅れ。そいつはとっくに城に行っちゃってたのさ。間抜けだよなあ。

諦めきれない俺は考えた末に、兵隊に志願することにした。志願兵としてなら俺みたいな平民でも城に入れるからだ。我ながら浅はかだったなあ。もう家族にも会えなくなるかもしけねえのに、あの女に告るためだけに俺の将来決めちまつたんだからな。

だが、ただの一兵士がそうそう城ん中をウロチョロできる訳がねえ。あの女もかなりの身分だつたしな。だから俺は頑張った。それなりの身分を手に入れるために。戦場にだって率先して出たし、この手で幾人もの敵兵を手に懸けた。そうして手を血に染めながら功績を挙げて、遂に王子直属の親衛隊にまで昇りつめた。

そして、あの女に再会した。ただ、最悪なことに再び会った女は王子の妻になっていた。笑えるだろ？ 俺はとんだピエロだつたのさ。その時、俺の世界は崩壊した。狂つちまつたのさ。気付けば俺は、その手に携えてた槍で王子を刺してた。躊躇いは、なかつた。その場は、それはもう大騒ぎさ。衛兵に取り押さえられる中、俺は極めて冷静に考えてた。急所を外しちまつたな、と。ちゃんと殺してやらなきゃ駄目だな、と考えて俺は夜中、牢を脱走した。城のことは知り尽くしてるからな。

王子の寝室に侵入して滅多刺しにしてやるうつと思つてた。正氣の沙汰じやねえよな。その時の俺はどうかしちまつてたんだ。だが、都合の悪いことに狂気の元凶もそこにいた。元凶は俺の前に立ち塞がつて、どうしてこんなことをするのか、もう止めてくれ、と悲しい表情で訴えてきた。その顔を見たときに、俺はハッと気づいた。自分のはじよつとしていることに。この顔をこんな悲しみに染めたのは誰だ？ 俺は目の前の女に、こんな表情を向けて欲しかつたのか？ そう考へると、俺の狂気は霧散した。同時に、この女の前から消えよつと思つた。互いのためにも、そのほうがいいと思つたんだ。ただ最後に、例え傷つけることになるとしても、俺の気持ちは伝えたかった。俺は女にゆっくり近づいて、『俺はあんたが好きだ。』そ

う囁いて、槍の柄で自身をくれて気絶させた。

そのまま隣国、この国に亡命して来たんだ。王子が憎くないと言え
ば嘘になるし、そのまま残れば間違いなく処刑されるしな。

亡命は極めて簡単だつた。他国の城の構造は熟知してゐるし、王子に
重症を負わせたことで疑われるこどもなかつた。直ぐに一部隊の隊
長を任されたよ。18歳の時だ。

これが初恋の結末さ。どうだい？ 酷いもんだろ？ だがな、大半の
奴は恋に敗れてるし、そういう奴はいつも辛い思いをするものさ。
振った振られたは互いに辛いけどな。あんたも経験あるだろ？ まあ
俺のは特に酷いがな。自業自得つてやつだ。

2度目の恋は俺が20の時だ。

その頃には俺も初恋のことは忘れていた。いや、戦場に忙殺されて
考える暇もなかつただけか。何しろ俺は率先して前線に立つてたか
らな。お陰で俺の部隊は名誉と死傷者が絶えなかつた。

そんな俺の部隊の副隊長は女だてらに突撃兵でな。ある日そいつに
言わたんだよ。俺はまるで、死にたがつてるように戦つてるそ
うだ。何だか心を見透かされたようで面白くなかったし、そこまで思
いつめてるつもりはなかつたんだが、そいつはしつこく絡んでくる
んだよ。正直ウンザリしてたぜ・・・。

何時だつたか、俺の母国と戦うことがあつた。しかも何の因果か、
俺の所属してた部隊とぶつかつちまつてな。戦いながら散々罵声を
浴びたよ。そいつらからしたら、俺は裏切り者だからな。戦場で死
ぬなら、こいつらに殺されるのがいいかもな。そう考え始めた時、
あいつが言ってた事もあながち間違いじゃなかつたなつて思い知つ

た。それに、俺にはそいつらを殺すことなんて出来なかつた。だから、槍を捨てて無防備な姿を晒したんだよ。かつての仲間に殺されるために、な。俺に怨みの籠つた一撃が振り下ろされた。

その一撃は・・・結局俺には当たらなかつた。副隊長が俺を庇つたんだ。きれいな紅い血が俺の視界を覆つた瞬間、俺は再び槍を手に取つた。その女を、俺が愛する女をこれ以上傷つけない為に。もう、俺のために大切な存在が傷つくるのは嫌だつたんだ。敵がかつての仲間だろうが、そして俺が裏切り者だろうが関係ない。俺は今を生きている。だから過去は関係ねえ。そう吹つ切れて槍を振るい、俺は『過去』をすべて殺した。

すべて殺し終えた時には、女はすでに虫の息だつた。なんでこんなことをつて聞けば、俺に理由のないまま戦場で死なれるのが許せなかつたらしい。はつきり言つて俺は強い。それほどの奴が腑抜けたまま、戦場で倒れるのは許さない。戦場で死ぬなら志しを持て、と言われた。

女の戦う理由は、婚約者の仇討ちだつた。昔、戦争に巻き込まれ死んじまつたらしい。だが、女が兵士になつた頃には仇の国はすでに滅んでいた。だから、戦争そのものを仇に今まで戦つてきた。一つでも多くの戦場を無くすために。

だつたらこんな所で死ぬなつて言つたんだが、後は俺が仇を討つてくれるそうだ。まったく、トンだ業を背負つちまつたもんだ。その男に会つたこともねえのによ。でも、悪い気はしなかつたな。

そうして俺の想つてる女は、かつての婚約者のことを想いながら、逝つちました。

そりやあ悲しいさ。結局俺の想いは伝えられなかつたしな。でも、そのことを後悔しちゃいねえ。何も告げないほうがいい時だつてあるんだ。

・・・もう時間がねえな。俺の最後の恋の相手はこの国のお姫様だ。そんな身分でありながら、国民全員のことを考えていらっしゃる。危険もかえりみず、こんな国境近くの街にまで民を励ましに来てる。そのことが外に漏れりや、敵の大群が押し寄せるだろうなあ。この街みたいに。あのお方のことだ。そのことに責任感じて、俺たち止め部隊に混じってここに残ろうとするだろうなあ。

そうだろう？お姫様。何してんだ？こんなところで。ここはあんたのいる所じゃない。今は皆最後の宴で盛り上がってるが、ここはもうすぐ5000の敵兵で埋め尽くされる。確かに、こんなことになつたのはあんたが原因かもしけねえ。だがな、ここにいる誰も皆あんたを恨んじやいねえよ。

・・・いいことを教えてやろうか。ここにいる誰もが、命令されてここにいるんじゃねえ。皆それぞれ大事な者のためにここにいるんだ。子供のため、親のため、家族のため、男のため、女のため、そして俺はあんたのために、それぞれ皆守る者のために戦い、散つていくんだ。こんな恋愛物語だつて、ありだろ？

だから・・・走れ！まだ最後の船が残ってる！あんたのために出港が遅れるんだ。それで船が逃げ遅れたら、俺達やあんたを許さねえ！守るためにここにいるのに、何も守れねえままに俺達を死なすつもりか！だから・・・行つてくれ！」

「・・・わかりました。でもひとつだけ、言わせてください。

私は・・・あなたのことが、気になつて仕方なくなつてしまつた。あなたのことと思うと、きっと夜も眠れない。あなたが死んでしまえば、私はきっと深く傷つくでしょう。

だから、生きて帰つてきなさい。そして、この私の気持ちに・・・責任をとつなさい。

それでは、また後日、「元気」

そうして、姫は去っていく・・・。

「・・・ははっ！」「りや死ねなくなっちゃったな。一国の姫様があんなに顔赤くして・・・。なんか罰があたるかもな！」

それじゃ俺たちも、戦闘準備開始だ！」

丘の下は、地も見えない程の丘陵で埋め尽くされている・・・。

「・・・か〜、こりや凄いな。5000ビックリか7000はいるじやねえか。対してこひらは・・・150いればいいとか。上等上等。何せ俺がいるからな。

よし！行くか！俺の物語の終幕、派手に決めるぜ！せいぜい俺の引き立て役になつてくれよ！

そして、長い長い戦いの夜は始まる・・・。

(後書き)

彼の物語はいかがでしたか?
ほとんどが一人の人物の言葉という変わった作品ですが・・・。
読んでください、ありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5759d/>

ある男の物語

2011年1月3日23時12分発行